中京大学　心理学研究科・心理学部紀要
第 9 巻 第 2 号（2010）19 ― 24 頁

母子画と人物二人法の比較

中京大学心理学部・心理学研究科　馬場　史津[注]

Comparison between mother-and-child drawings and dual human image technique.

BABA, Shizu（School of Psychology, Chukyo University）

Participants created dual human image drawings. In regard to dual human image, participants were then asked to describe the subjects of their drawings, whether the subjects were real or imaginary, the relationship of the human image, and action depicted in the drawing. The majority of participants（58.4%）responded that the subjects of their drawings were "unknown persons". Form, facial expression, body touch and eye contact were compared between the mother-and-child and dual human image drawings. The dual human image drawings tended to have fewer instances of body touch and eye contact than the mother-and-child drawings. These results suggest that drawings created using the dual human image technique reflect a wider variety of personal relationships.

Key words: mother-and-child drawings, dual human image technique, object relation

Ⅰ　はじめに

人をテーマにした描画法には，人物画のように 1 枚の紙に 1 人の人物を描かせる方法と，家族画のように複数の人物を描かせる方法がある。そして人物画では主に自己像，家族画には家族関係・三者関係が投映されると考えられている。さらに両者の間に位置する二者関係に注目した描画法として，アメリカの臨床心理学者 Gillespie（1989，1990）が考案した母子画がある。母子画は対象関係論を理論的背景として，「お母さんと子どもの絵を描いてください」と教示する描画法で，描かれた母親像と子ども像が内的世界の自己と対象を表象し，その関係性に描き手の対象関係が投映されると仮定する。筆者は現実の対人関係を規定する対象関係が投映されるのであれば，それを読み取ることにより心理療法の治療者－患者関係を予測する手掛かりになるのでないかという観点から，大学生における母子画の標準タイプの研究，臨床群の数量的研究，事例研究を重ね，また動的母子画の可能性についても検討してきた（馬場，1997；2003；2005；2008；2009）。母子画を通じてクライエントの理解が深まった事例も多く体験したが，一方で特に母親との強い葛藤を抱えている事例では「お母さんと子どもの絵」という教示が抵抗を強める事例もみられた。そこで今回は，描く人物を限定しない人物二人法に注目することにした。

安藤（1990）は絵画療法の実践のなかで，複数の人物が描かれる際の人物像の変化に注目し，治療上の工夫として人物二人法を発表した。安藤は複数の人物像が描かれる場合，そこには自己像と他者像という関係性が浮かびあがり，他者表現には自己と他者の役割関係が表現され，個人に内在しているさまざまな人間関係の形をみることができる，さらに，その人間関係の形はその個人の社会的起源をなしていると説明している。また，「絵画療法過程のなかで現われる複数の人物像には，治療者との関係などと密接な関連をもった表現がなされている場合も多く認められる」（安藤，1989）と述べ，治療者－患者関係が描画に表現されうると指摘している。

Gillespie の *Object relations as observed in projective mother and child drawings* が The art in psychotherapy に掲載されたのは 1989 年であり，同時期に発表された両者の発想は非常に近いものである。両者はともに事例を紹介し，技法の特徴や意義を論じている。そこで本研究では数量的な視点から母子画と人物二人法を比較し，それぞれの特徴を明らかにすることを目的とした。

Ⅱ　方法

人物二人法は大学生 101 名（男性 30 名，女性 71 名）を対象に講義時間を利用して集団法で実施した。

注　babashiz@lets.chukyo-u.ac.jp

平均年齢は 19.27 歳（SD＝0.58）であった。

3B の鉛筆と横向きの A4 版白紙を配布して「二人の人物を描いてください」と教示した。PDI 指標（描画後の質問）は『描いた人物』『二人の関係』『現実か架空か』『二人の行為』について質問した。描画指標は母子画で用いた『形態』『表情』『身体接触』『アイコンタクト』の出現頻度を算出し，人間の母子で 1 人の子どもを描いた母子画（男性 173 名，女性 392 名）と比較した。

Ⅲ　結果

1．PDI 指標

① 『描いた人物』

『描いた人物』は「描いた絵は誰と誰ですか」と質問し，回答は自由記述とした。表 1 に示したように『描いた人物』は〔二人とも知らない人〕が 59 名（58.4%），次いで〔自分と知人〕が 25 名（24.8%）であった。

② 『現実か架空か』

『現実か架空か』は「これは現実にあったことですか」と質問し，現実と架空から選択させた。その結果，82 名（81.2%）が〔架空〕の場面を描いたと回答した。

③ 『二人の関係』

『描いた人物』の説明から筆者が分類した。特定できた 49 名の分類は〔友人〕が 21 名（42.9%），〔恋人・夫婦〕が 16 名（15.8%），〔母子〕は 5 名（5.0%）であった。

④ 『二人の行為』

表 2 に示したように，描かれた状況を理解するてがかりとして『二人は何をしているところですか』と質問し，自由記述で回答を求めた。その結果，〔会話〕が 18 名（17.8%）で最も多く，次に〔遊び・デート・散歩〕が 14 名（13.9%），〔手をつないでいる〕が 13 名（12.9%），〔立つ・座る〕が 12 名（11.9%）となった。一方で〔特に何もしていない〕の回答も 7 名（13.3%）にみられた。

2．描画指標

① 『形態』

〔全身／半身／顔／隠れている〕に分類した。二人の人物像の『形態』の一致率は 97%であった。先行研究（馬場，2005）により母子像の形態も概ね一致していることが確認されているため，今回の調査では左側に描かれた人物像と母親像を比較した。

表 1　PDI 指標「描いた人物」「二人の関係」の出現頻度

「描いた人物」（N＝101）	度数（%）	「二人の関係」（N＝49）	度数（%）
二人とも知らない人	59（58.4）	友人	21（42.9）
自分と知人	25（24.8）	恋人・夫婦	16（15.8）
二人とも知人	7　（6.9）	母子	5（10.2）
自分と知らない人	5　（5.0）	兄弟姉妹	5（10.2）
有名人	4　（4.0）	先輩・後輩	1　（2.0）
知人と知らない人	1　（1.0）	先生・生徒	1　（2.0）

表 2　PDI 指標「二人の行為」

「描いた人物」（N＝101）	度数（%）
会話	18（17.8）
遊ぶ・デート・散歩	14（13.9）
手をつなぐ	13（12.9）
立つ・座る	12（11.9）
一緒に～をする	10　（9.9）

表 3 『形態』の出現頻度

	全身	半身	顔	隠れている
人物二人法	75（74.3）	11（10.9）	15（14.9）	0（0.0）
母子画	464（82.1）	70（12.4）	23　（4.1）	8（1.4）

その結果，出現頻度に有意な偏りがみられた（χ^2＝19.70　df＝3　p＜.001）。残差分析の結果，人物二人法は母子画に比べ，〔顔〕が描かれることが多かった（表３参照）。

② 『表情』

〔笑顔／非笑顔／後ろ姿／空白の顔〕に分類した。『形態』と同様に左側に描かれた人物像と母親像を比較した。表４に示したように，人物二人法では〔笑顔〕が57名（56.4%），〔非笑顔〕が24名（23.8%），〔後ろ姿〕が２名（2.0%），〔空白の顔〕が18名（17.8%）であった。χ^2検定の結果，出現頻度に有意な偏りがみられた（χ^2＝8.08　df＝3　p＜.05）。残差分析の結果，人物二人法は母子画の母親像に比べ〔笑顔〕が少ないことが示された。また，左側に描かれた人物像と母子画の子ども像を比較した結果，有意な偏りはみられなかった。

③ 『身体接触』

〔接触あり／接触なし〕に分類した。〔接触あり〕が人物二人法では34名（33.7%），母子画では444名（78.6%），〔接触なし〕が人物二人法では67名（66.3%），母子画では121名（21.4%）であった。χ^2検定の結果，出現頻度に有意な偏りがみられ（χ^2＝85.34　df＝1　p＜.001），人物二人法は有意に〔接触なし〕が多かった。

④ 『アイコンタクト』

視線の方向により〔相互／一方的／なし〕の３つに分類した。その結果，人物二人法では〔相互〕が14名（13.9%），〔一方的〕が14名（13.9%），〔なし〕が73名（72.3%）であった。χ^2検定の結果，描画法の間には出現頻度に有意な偏りがみられ（χ^2＝6.10　df＝2　p＜.05），残差分析の結果，人物二人法では有意に〔なし〕が多く，〔相互〕が少ない傾向がみられた（表５参照）。

３．人物二人法に描かれた母子

人物二人法で母子を描いた５名について検討した。PDI指標の『現実か架空か』では〔現実〕が２名，〔架空〕が３名，『二人の行為』は〔散歩〕が２名，〔手をつないでいる〕が１名，〔笑っている〕が１名，〔一緒に～している〕が１名であった。

描画指標の『表情』では，二人の表情が一致していた４名のうち，〔笑顔〕が１名，〔非笑顔〕が１名，〔空白の顔〕が２名，表情の不一致は〔非笑顔〕と〔笑顔〕の組み合わせで１名であった。『身体接触』では〔接触あり〕が４名，『アイコンタクト』では〔なし〕が４名であった（表６参照）。

Ⅳ　考察

１．PDI指標

① 『描いた人物』『現実か架空か』

安藤（1990）は人物二人法の特徴として１）現実

表４ 『表情』の出現頻度

	笑顔	非笑顔	後ろ姿	空白の顔
人物二人法	57（56.4）	24（23.8）	2（2.0）	18（17.8）
母子画（母）	392（69.4）	88（15.6）	17（3.0）	68（12.0）
母子画（子ども）	348（61.6）	128（22.7）	20（3.5）	69（12.2）

表５ 『アイコンタクト』の出現頻度

	相互	一方的	なし
人物二人法	14（13.9）	15（14.9）	72（71.3）
母子画	118（20.9）	112（19.8）	335（59.3）

表６　人物二人法で母子像を描いた例

	場面	二人の行為	表情	身体接触	アイコンタクト
A	現実	手をつなぐ	笑顔／笑顔	接触あり	なし
B	現実	散歩	非笑顔／非笑顔	接触あり	なし
C	架空	笑っている	非笑顔／笑顔	接触なし	一方的
D	架空	散歩	空白／空白	接触あり	なし
E	架空	一緒に～をする	空白／空白	接触あり	なし

の具体的対人場面が表現される（現在の情景，過去の子どものころの情景が多い），2）架空の想像的対人関係がさまざまに表現される，3）自己との関係において人物像が現れやすい，などを挙げている。大学生を対象とした今回の調査では，〔知らない人〕が58.4%，〔架空〕が81.2%，また子どもの人物像が描かれることも少なくなかった（図1参照）。〔知らない人〕は，特定の人ではないという意味であり，〈架空の想像的な対人関係〉が多く描かれたといえよう。臨床的な絵画療法として実施された安藤の事例では，自己との関係において人物像が描かれ，自己を振り返る手段として活用されたと考えられる。一方で今回のように調査として，あるいは検査として実施する場合は「人物を二人描いてください」という教示が，自分と誰かといった現実的関係よりも，内的イメージにある人物の姿とその関係を想起させやすいと推測される。この点は内的イメージとしての母子が描かれる母子画と共通しており，人物二人法もまた個人の対象関係が投映される描画法であると考えられた。

② 『二人の関係』『二人の行為』

人物二人法で特定された『二人の関係』は〔友人〕が最も多く，次いで〔恋人・夫婦〕であった。PDIからは特定されなかったものの，母子や先生・生徒などを除いては同じような年齢の二人を描く場合がほとんどであった。子どもの友人関係が描かれる場合も多く，人物二人法には同世代の仲間関係や，母子のような保護－保護される関係ではない横並びの関係としての自己像と他者像の関係が投映されやすいのではないだろうか。この点については，成人期ではどのような絵が描かれるのか，さらなる研究によって明らかにする必要があるだろう。

また，友人や恋人を思い浮かべる人が多いなかで，〔母子〕を思い浮かべる人は，そこに何らかの思いがある人かもしれない。この点については後述する。

『二人の行為』は〔会話〕や〔遊ぶ〕〔手をつなぐ〕などが上位を占めた。母子画では〔買い物に行く・買い物から帰る〕が最も多いが，〔散歩〕〔手をつないでいる〕〔話している〕などが続く。どちらの描画法もPDIで何らかの関係性を説明することで，描画だけでは表現できない二人の関係性を補足しているものと考えられる。

今回の調査では，特殊な例として「自分の中の自分と対話」（図2）がみられた。母子に限定しない教示が，描き手の内的世界の表現につながった例と言えるかもしれない。

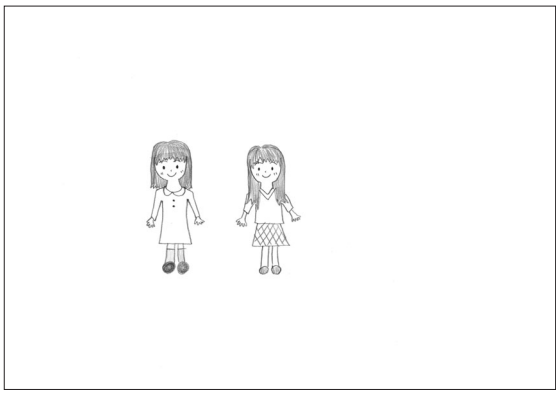

図1

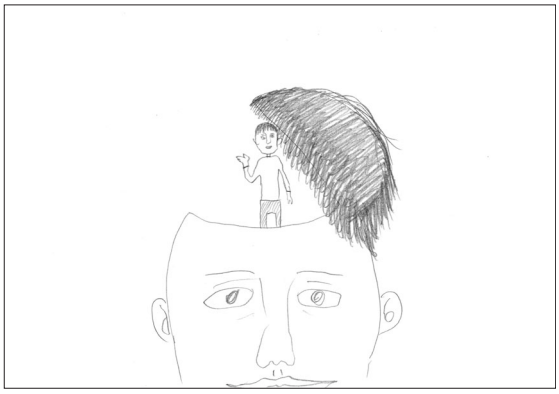

図2

2．描画指標

① 『形態』

人物二人法は母子画に比べて〔顔〕が描かれることが多かった。母子画では〔顔〕の表現は4%程度の出現率であり，母親からの安定した養育体験に乏しいこと，部分対象関係を示す指標であると考えられている。しかしながら，人物二人法の〔顔〕の出現率は14.9%と高く，〔半身〕の10.9%を超えている。高橋（1987）は大学生の家族画では記念写真スタイルが典型的な絵であり，これには家族の半身や顔だけを描く場合も含まれると述べている。個人の対象関係が人物二人法に投映されるのであれば，〔顔〕の出現率はそれほど多くないのではないかと予測していたが，人物二人法に描かれる関係性は現実の対人関係により近いものなのかもしれない。

② 『表情』

人物二人法の人物像は母子画の母親像に比べて〔笑顔〕が少なく，子ども像とは差がみられなかった。人物二人法の人物像の表情は概ね一致していることから，人物二人法に描かれる人物は，母子画の

子ども像に相当するのかもしれない。母子画では母親と子どもにテーマを限定することによって，描き手が重要な他者をどのような存在として心の中に取り入れているのかを母親像の表情から読み取ろうとする。たとえば笑顔の母子像は，描き手の心の中に子どもをなだめるような笑顔の母親が取り入れられ，それによってなごやかな気持ちとなっていることを笑顔の子ども像が象徴すると考えるのである（馬場，2005）。人物像の表情は描き手の感情を反映するといわれるが（Machover, 1949），人物二人法の表情は，描き手が対象との間でどのような気持ちを味わっているのかを表していると考えられる。

③『身体接触』

人物二人法では〔接触なし〕が 66.3%であった。友人関係の描写が多い人物二人法に〔接触なし〕が多いのは当然のことであろう。人物二人法でも〔恋人・夫婦〕や〔母子〕を描く場合には身体接触が描かれることが多い。どのような関係を描くのかによって身体接触の状況は異なる。母子画では『身体接触』が信頼感のサインとみなしているが，人物二人法では他者とのコミュニケーションのありようをどこから読み取るのか，新たな着眼点が求められる。

④『アイコンタクト』

人物二人法では母子画に比べて〔相互〕のアイコンタクトが少ない傾向がみられた。〔相互〕は直接的に互いが見つめ合う姿であり，母子画では濃密な母子関係を象徴すると考えられている。友人関係が描かれやすい人物二人法であれば，この結果は自然なものといえるだろう。

今回の分類は，アイコンタクトが心の交流を象徴するとの仮説によるものであったが，図 3 のように人物同士のアイコンタクトがなくても，一緒に何かを見ている絵も描かれる。北山（2000）は浮世絵には同じ対象をともに眺める（共同注視）母子が多いことを指摘している。北山は，こういった絵には強い絆で結びつく母子の間をひらいて間接化し，間をとりもつモノがあり，同じモノを見ながら二人が心の外で，また心の中で語りあっているように見えること，この関係は親子だけでなく男女のカップルや複数の大人たちが出てくる絵にも頻繁にみられると述べている。図 3 からは間接的で穏やかな二人の交流がうかがわれる。今後は母子画，人物二人法に描かれる共同注視の出現頻度，またその意味を明らかにすることが不可欠になる。

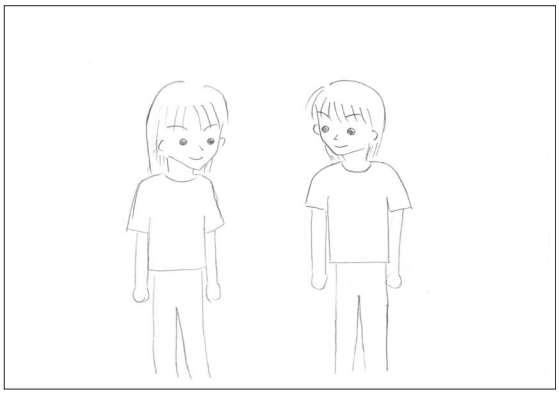

図 3

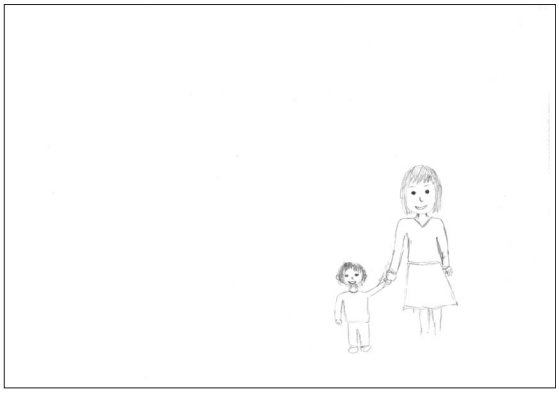

図 4

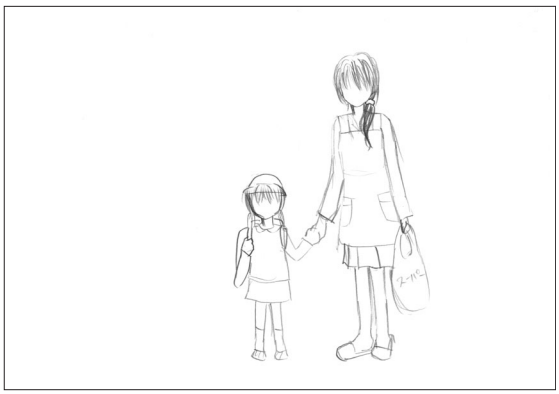

図 5

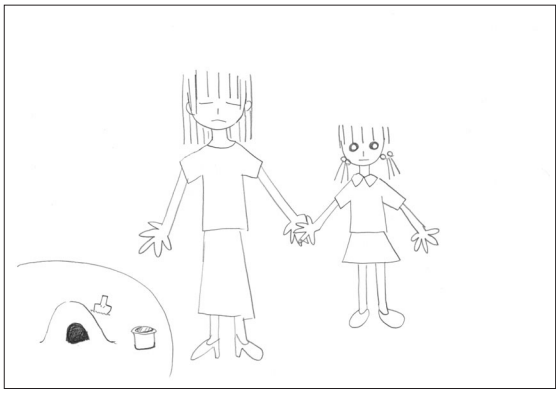

図 6

3．人物二人法に描かれた母子

人物二人法で母子を描いた5名のうち，図4は，母親と子どもが笑顔で手をつなぐ姿が描かれている。これは母子画の標準タイプ（馬場，2005）にあたるが，筆圧がやや弱く，短く重なったライン，母親像の足の抹消は自己不確実感を伺わせるものである。また，図5のような〔空白の顔〕の母子が2名にみられた。〔空白の顔〕は，高橋（1991）が表面的な人間関係しかもてなかったり，他者に対して警戒的であったりする傾向を示すと指摘する表現である。また，困惑した表情の母親像が描かれた図6のような〔非笑顔〕の表情が2名にみられ，人物二人法で描かれた母子からは肯定的な関係性を伺わせるものが少なかった。これまでに述べたように，友人関係や夫婦・恋人の関係性を描くことが多い人物二人法において母子を描くということは，母子関係への何らかのこだわり，葛藤を示すサインと考えることができるのではないだろうか。

V　おわりに

母子画は現在の対人関係の原点となるような，母親（重要な他者）との体験がどのようなものであったかが表現される描画法であり，人物二人法は，描き手が誰をどのように描いたかをみることによって，対人関係における描き手の関心や，どのような関係を体験しているのかをアセスメントできる描画法であると考えられた。

どちらの技法も描き手の対人関係の内的イメージが投映されるという点では共通しているが，相違点もいくつかみられた。人物二人法で描かれた人物の年齢や二人の関係を正確に理解するPDIの作成，また児童や成人の特徴を確認し，臨床例での検討を深めることなどによって人物二人法の着眼点が明確になると思われる。当然のことながら臨床場面では，クライエントの何をアセスメントするのかによって選択される描画法は異なる。母子画を含めたそれぞれの描画法の特徴を明らかにすることは今後の課題であろう。

引用文献

安藤治　1989　絵画療法課程で現れる他者表現　芸術療法学会誌，20，15-20
安藤治　1990　人物二人法　－他者表現の治療的機能－　芸術療法学会誌，22，46-54
馬場史津　1997　Mother and Child Drawingsの基礎的研究　社会精神医学研究所紀要，26，30-36
馬場史津　2003　母子画の基礎的研究　－成人版愛着スタイル尺度との関係から－　臨床描画研究，18，110-124.
馬場史津　2005　母子画の基礎的・臨床的研究　北大路書房
馬場史津　2008　母子画による心理療法過程のアセスメント　－3枚の母子画の比較　臨床描画研究，23，196-211.
馬場史津　2009　動的母子画の試み　―動的母子画と母子画の比較―　中京大学心理学研究科・心理学部紀要　8（2），9-16
Gillespie, J. 1989　Object relations as observed in projective Mother-and-Child Drawings. *The art in psychotherapy*, 16，163-170
Gillespie, J. 1994　The projective use of Mother-and-Child-Drawings. A manual for clinicians. Brunner/Mazel.　松下恵美子・石川元（訳）　2001　母子画の臨床応用－対象関係論と自己心理学－　金剛出版
北山修　2000　二者間内交流と二者間外交流：浮世絵のなかの母子関係　芸術療法学会誌，31，5-13
Machover, K．1949　Personality projection in the drawing of human figure. Charles C. Tomas.　深田尚彦（訳）1974　人物画への性格投影　黎明書房
高橋雅春・高橋依子　1991　人物画テスト　文教書院
高橋依子　1987　大学生の家族画　－再テストを中心として－　臨床描画研究，2，27-42

（受理年月日　2010年1月29日）